

実践研究

中学校課外活動におけるサッカー指導に関する日中比較：
指導者のインタビュー調査から

Comparison of soccer instruction as extra-curricular activity in Japan and
China : From interviews survey of instructors

劉 佩¹⁾ 梅垣 明美²⁾ 高本 恵美³⁾

Pei LIU¹⁾ Akemi UMEGAKI²⁾ Megumi TAKAMOTO³⁾

Abstract

Chines soccer has been supported form government to develop world level. While rejuvenation of the soccer is developing rapidly, issues concerning with the humanity of adolescents surfaced. Meanwhile in Japan, there are a string of success in the foster of personality such as being awarded the “Fair Game Award” in the youth championship. It is commonly believed that China can, in fact, takes the soccer instruction in Japan as reference for improving the issues. In this study, junior high school soccer instructors from both Japan and China have been interviewed for comparison and reveal the difference of their approaches in the semi-structured interviews of 6 school soccer club instructors from China and Japan. As for data analysis, Modified Grounded Theory Approach has been adopted.

The followings are the two findings in our study; (1) Compared to the very much devoted soccer instruction approach, such as proactive participation in local volunteer activities, for the growth of youths in Japan, Chinese instructors tend to focus on understanding from class teachers and parents more than their own teaching effort. (2) Japanese instructors aim to work on the improvement of the humanity and competitiveness of the students while Chinese instructors weigh competitiveness more importantly.

キーワード：サッカー部, 人間性の育成, 競技力向上, 半構造化インタビュー, M-GTA
School soccer clubs, Fostering humanity, Improving competitiveness,
Semi-structured interviews, M-GTA

1. 緒言

近年中国では、国をあげてサッカーの強化に取り組んでいる。2015年には、「中国足球改革発展総体方案(中国サッカー改革総合計画)」(以

下「方案」と略す)が策定され、サッカー振興の具体策が発表された。その一つに、学校を基盤として全国にサッカーを普及させることが掲げられ、「サッカーが人を育てる」という理

1) 大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科 *Graduate School of Sport and Exercise Sciences, Osaka University of Health and Sport Sciences*

2) 同志社女子大学 *Doshisha Women's College of Liberal Arts*

3) 大阪体育大学体育学部 *Osaka University of Health and Sport Sciences, School of Health and Sport Sciences*

念のもと生徒の人格形成を目指すことや、課外活動であるサッカーチームの設立を推進することなどが盛り込まれた^{注1)}(国務院, 2015)。方案では、生徒の競技力を高めること、指導者を育成することなどの競技力の向上に向けた取り組みと、社会の規則を守ること、道徳規範を身につけることなどの人間性の育成に向けた取り組みが示された。

このように中国では、競技力の向上とあわせて人間性の育成が推奨されている。しかし、サッカー振興を急激に進める中、サッカーの様々な場面で青少年の人間性にかかわる問題が生じている。例えば、郭・謝(2018, p.59)は、方案が策定された後、学校における指導現場では、指導者が結果を追い求めるあまり勝利至上主義に陥り、人間性の育成が軽視されていることを指摘した。劉(2019, p.81)も同様に、学校におけるサッカーの指導者には人間性の育成を軽視する傾向が認められ、サッカーの試合では、殴り合い事件が起こるなど審判や対戦相手をリスペクトしない礼儀を欠く態度がみられると主張した。朱ほか(2019)は、上海の大学サッカーリーグ戦では、殴り合いなどの不良行為が頻発していることをアンケート調査から明らかにした。

中国では、国のサッカー振興の基盤に課外活動が位置づけられていたが、日本でも、国のスポーツ振興の基盤に学校における部活動が位置づけられてきた。スポーツ庁は、学校の部活動が日本のスポーツ振興を大きく支えてきたこと、さらに生徒の人間性の育成に寄与してきたことを指摘した(スポーツ庁, 2018, p.1)。サッカーに関していえば、日本サッカー協会(Japan Football Association)(以下「JFA」と略す)は、学校における部活動を、ヨーロッパおよび南米のサッカー強豪国にはない日本独自のスポーツ文化として捉え、日本の選手育成の一つに位置づけてきた(JFA, online1)。2018年には、部活動の指導者に向けて『中学校部活動サッカー指導の手引き』を発行し、中学校の部活動を全面的に支援している。そこでは、技術・戦術指導、練習計画、およびトレーニング

の方法などの競技力の向上に向けた取り組みと、フェアプレーおよびリスペクトの精神の大切さなどの人間性の育成に向けた取り組みを示している(技術委員会テクニカルハウス, 2018)。

JFAは、競技力の向上と、サッカーを通じた人間性の育成を目標に掲げサッカーを推進してきた。特に人間性の育成にかかわって、2008年度から開始されたリスペクトプロジェクト(JFA, online2)、2015年に発表された「JFAのバリュー」(JFA, online3)などがある。このような日本サッカー界における人間性の育成に向けた取り組みの成果として、日本では、プレー中にファウルが少ないこと、あるいは、対戦相手およびレフェリーをリスペクトすることなどが賞賛されてきた。例えば、梅澤(2014, p.77)は、2013年に開催されたFIFA U-17W杯において日本代表のフェアプレーが世界中から賞賛されたことを指摘した。また、2019年に開催されたFIFA U-20W杯では、日本代表はフェアプレー賞を受賞した(FIFA, online)。

先に示した中国においてサッカーの様々な場面で生じている問題を改善するためには、日本におけるサッカーの指導が参考になるのではないかと考えられる。日本は、競技力の向上と、人間性の育成をバランスよく指導していると思われるからである。そこで国のサッカー振興の基盤として位置づけられている中学校における部活動を対象に、日本と中国におけるサッカーの指導を比較することとした。

中国では、学校におけるサッカー指導の日中比較に関する先行研究として、施設、資金援助、競技大会の種類、選手・コーチの育成、および、指導者の管理体制などを比較した研究(潘ほか, 2017; 張, 2017; 丁ほか, 2018)、サッカーの発展状況(サッカー人口の拡大、試合の規模など)、選手・コーチの育成、管理体制などを比較した研究(陳・康, 2017; 張・李, 2018)があった。しかし、中国のサッカー指導について、競技育成と人間性の育成の両面から検討した研究は見当たらない。

日本では、学校におけるサッカー指導の日中

比較に関する先行研究は見当たらないが、日本のサッカー指導について、競技育成と人間性の育成の両面から検討した研究が行われていた(古賀・堀野, 2013; 立木, 2018). 古賀・堀野(2013) および立木(2018)は、日本におけるサッカー部の指導者を対象にインタビューを行いサッカーの指導について明らかにした。ここでは、日本のサッカー指導の状況については明らかにされたが、日本と中国におけるサッカー指導を比較検討し、その違いが明らかにされることはなかった。

以上のように、日本と中国の学校におけるサッカー指導、特にサッカーの課外活動の指導者を対象に、サッカーの指導について比較検討した研究は管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では、日本と中国における中学校のサッカー部(中国はサッカーチーム、以下「サッカー部」と記す)^{注2)}の指導者を対象にインタビュー調査を行い、サッカーの指導について比較し、日本と中国における指導の違いを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1. 対象者

日本の公立中学校のサッカー部の指導者3名(J①, J②, J③)と中国の公立中学校のサッカー部の指導者3名(C①, C②, C③)を対象とした。対象者は、木下(2003, pp.117-123)の理論的サンプリングに基づき次のように選定した。本研究の目的を踏まえて、まずサッカーを専門とする研究者から中学校のサッカー部の指導者で、かつ本研究の目的を理解し、インタ

ビュー調査に応じてくれる指導者を紹介してもらった。次に、指導者の指導と指導実績との間には何らかの関連があるのではないかと判断し、全国大会、府県大会、地区大会の指導実績を残している指導者をそれぞれ1名ずつ選定した。その後、中国において同程度の指導実績を残している中学校におけるサッカー部の指導者を選定した。

表1は、対象指導者の概要を示している。6名の指導者とも、男性で、教科として保健体育科(中国では体育与健康)を担当しており、専門種目はサッカーで、それぞれサッカーの指導者資格を持っていた。J①は、30代後半、指導歴15年、全国大会出場、J②は、40代前半、指導歴17年、府県大会出場、J③は、30代前半、指導歴8年、地区大会出場の指導実績を持っていた。C①は、30代後半、指導歴10年、全国大会出場、C②は、20代後半、指導歴6年、省級大会出場、C③は、30代後半、指導歴12年、市級大会出場の指導実績を持っていた(表1)。

2.2. データ収集

日本および中国におけるサッカー部の指導者に半構造化インタビューを実施した。日本のインタビュー実施時期は、2018年9月から11月、中国のインタビュー実施時期は、2019年2月から3月であった。インタビューの場所は、調査対象となった中学校の応接室またはグラウンドであった。

表2は、日本語と中国語のインタビュー・ガイドを示している。まず、メリアム(2004, pp.110-120)に基づいて日本語のインタビュー・

表1 対象指導者の概要

| 指導者 | 性別 | 年齢 | 教科 | 専門種目 | 資格 | 指導(年) | 指導実績 |
|-----|----|-------|------|------|----|-------|-------|
| J① | 男性 | 30代後半 | 保健体育 | サッカー | A級 | 15 | 全国大会 |
| J② | | 40代前半 | | | C級 | 17 | 府県大会 |
| J③ | | 30代前半 | | | B級 | 8 | 地区大会 |
| C① | | 30代後半 | 保健体育 | | D級 | 10 | 全国大会 |
| C② | | 20代後半 | | | D級 | 6 | 省級大会† |
| C③ | | 30代後半 | | | C級 | 12 | 市級大会† |

†中国の省級大会は日本の府県大会と、市級大会は日本の地区大会と同程度であった。

ガイドを作成した。具体的には、問題作成において、2つのことを同時にたずねる多重質問や「はい・いいえ」で答えられる誘導問題を避けた。これら作成された質問項目について、サッカーの指導に関するインタビュー・ガイドとしての妥当性を担保するため次の手続きを行った。質的研究の実施方法について十分に理解しているスポーツ教育学を専門とする研究者1名、スポーツ教育学を専門とする大学院生1名、および、サッカー競技を専門としサッカーの指導者資格を有する研究者1名がサッカーの指導に関する質問として適切かどうかを確認した。3名の中で意見の相違が生じた場合は、お互いに議論した上で質問内容を修正した。

次に、日本語のインタビュー・ガイドを中国語に翻訳した。中国語に翻訳する際、「現在、スポーツ庁から練習時間（1日2時間以内）、休養日（一週間に2日以上）などについて指針がだされましたが、それについてどのように思

われますか」という質問については、練習時間および休養日の制定について国からの方針が中国にあるかないかを確認した後、サッカー部の練習時間および休養日の制定について質問した（表2）。

2. 3. 分析方法

本研究では、インタビュー内容である文字データを、木下（2003）によって提唱された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ Modified Grounded Theory Approach（以下「M-GTA」と略す）を用いて分析した。M-GTAは、人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究、特に、医療・看護・リハビリテーション・臨床心理および教育などの実践的なヒューマンサービス領域、かつプロセス的性格を持っている現象を分析するのに適している（木下，2003，pp.89-91）。本研究は、教育という実践的なヒューマンサービス

表2 インタビュー・ガイド

| 日本語 |
|--|
| 1. サッカーの指導について |
| <ul style="list-style-type: none"> ・あなたは、サッカーの指導にあたって何を参考していますか。 ・生徒の技能を高める要因は何だと思いますか。 ・どのようなことに気を付けて指導をされていますか。 |
| 2. サッカーの指導における指導者の考え方について |
| <ul style="list-style-type: none"> ・サッカーの指導では、何を目的に指導されていますか。 ・サッカーの練習時間、練習内容、試合での作戦などは、誰が決めていますか。 ・サッカー以外の事柄、例えばグラウンド整備、道具の準備や片づけ、部室の清掃などについては、どのように運営していますか。 ・現在、スポーツ庁から練習時間（1日2時間以内）、休養日（一週間に2日以上）などについて指針がだされましたが、それについてどのように思われますか。 |
| 3. サッカーの指導に関わる制度面について |
| <ul style="list-style-type: none"> ・サッカーの指導において、環境（施設・用具など）や活動費などについて要望はありますか。 ・国のサッカーの水準を高めるためには何が必要だと思いますか。 |
| 中国語 |
| 1. 关于训练指导 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・在您的足球训练指导中所参考的资料是什么？ ・您认为提高学生足球水平的主要因素是什么？ ・您在指导的过程中注重哪些方面？ |
| 2. 关于在足球指导过程中教练员的观点 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・在足球训练指导过程中，您是以什么为目的进行指导？ ・训练时间，训练内容以及比赛中所使用的战术由谁来决定？ ・足球以外的事情，例如关于场地，器材室的清扫，使用器材道具的准备整理是以怎样的方式进行？ ・现在，对于校园足球训练的时间以及休息日是否有统一的规定？训练时间和休息日怎么样安排的？ |
| 3. 足球指导相关的制度方面 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・在足球指导方面，对于环境（设施，用具等）和活动经费等有什么期望？ ・为提高中国足球水平什么是必要的？ |

表3 分析ワークシートの例

| | |
|-------|--|
| 概念名 | 研修への参加 |
| 定義 | サッカー協会が主催する研修に参加する |
| 具体例 | (J①) 実際に、去年サッカー協会からヨーロッパ研修に行かせてもらって、イングランドにいったんですけど、自分が思ったことを向こうでも聞いてきたりとかし、そういう情報を入れるようにしている感じです。 (J②) トレセンのコーチをしていると関西トレセンの練習メニューが降りてきたり、研修が大阪府のトレセンはあるので、必ず参加します。実技を伴う研修が年1回あるので、そこに出ています。 (C①) 去年3ヶ月フランスに研修に行かせてもらいました。フランスの講師からヨーロッパにおけるサッカーの指導理念やサッカーの歴史、また最新の指導方法も紹介してもらいました。2009年からサッカー協会は、毎年2回研修を行うので、必ず参加します。研修で聴講した講義など参考にしています。 (C②) 毎年研修に参加して、そこで出された資料から、最新の情報を参考にします。大学の時に、私は高校女子サッカーチームのコーチをしており、その時から研修に参加しています。 (C③) 毎年2回研修があり、研修でサッカーの指導に関する資料をもらうので、それを参考にします。 |
| 理論的メモ | ・日中の指導者は海外へ研修の機会があった。 ・JFAはスペインの練習方法などを参考にしている。 ・日中の指導者は積極的に研修に参加する。 |

領域において、指導者が生徒との相互作用を通じて生徒の成長を促すというプロセス的性格を有した現象を対象としている。そのため、M-GTAを分析方法として採用した。

分析は、木下(2003)に基づき次のように行った。まず、収集した文字データをどのような角度から分析するのかを定める分析テーマと(木下, 2003, p.134)、収集した文字データを特定の人間に焦点をおいて解釈するために設定する分析焦点者を決めた(木下, 2003, p.138)。本研究では、分析テーマを「生徒の成長を促すサッカーの指導」とし、サッカーの指導者の立場から文字データを解釈するため分析焦点者を「中学生にサッカーを指導する指導者」とした。次に、各対象者の文字データを通じて、分析テーマに関連のある箇所に着目し、具体例を抽出した。その具体例をもとに概念を生成した。概念を生成する際には、概念ごとに分析ワークシートを作成した(表3)。また、生成した概念の意味を表す「定義」を短文で表現し分析ワークシートに記入した。分析のプロセスにおいて概念の解釈や反対例、疑問などが生じた際は、分析ワークシートの「理論的メモ」欄に記入した。その後、生成した概念と他の概念との関係性を検討し、複数の概念が同じような関係性にある場合はカテゴリーを生成した。カテゴリーの細分化が可能な場合はサブカテゴリーを設定した。最後に、「生徒の成長を促すサッ

カーの指導」について生成したカテゴリー、サブカテゴリーおよび概念を用いてストーリーラインを作成し、全体像を結果図にまとめた。

なお、分析結果の妥当性を担保するため、第1に、M-GTAの分析方法について十分に理解しているスポーツ教育学を専門とする研究者1名とスポーツ教育学を専門とする大学院生1名が議論しながら文字データの分析を行い、第2に、M-GTA研究会の文字データの分析を行った者とは別の大学院生1名がスーパーバイザーとして分析結果の妥当性を確認した。

2.4. 倫理的配慮

本研究は、協力校の学校長およびサッカー部の指導者に、研究の目的および調査内容について、文章および口頭で説明を行い研究の同意を得て行われた。特に、会話の内容をICレコーダーで録音すること、インタビュー後録音を持ち帰り逐語録を作成することなどについて、同意を得た。なお、本研究は、筆頭著者が所属する研究倫理審査委員会の承認を得て実施された(承認番号:18-9)。

3. 結果

M-GTAによる分析の結果、5個のカテゴリーおよびそれに含まれる2個のサブカテゴリー、25個の概念が作成された。カテゴリー、サブカテゴリー、概念、定義および対象者数の

一覧を表4に示した。以下、カテゴリーを<>,サブカテゴリーを【】,概念を[]で表記し,それぞれの関係をみていく。

3. 1. 対象者と抽出された概念

日本の指導者J①, J②, J③(3名)と中国の指導者C①, C②, C③(3名)の両者から抽出された概念は, [研修への参加](5名), [他の教師との情報交換](4名), [ヨーロッパのサッカーの情報](2名), [生徒のやる気](6名), [指導者の質を高めること](6名), であった。

日本の指導者から抽出された概念は, [専門機関からの出版物](3名), [恵まれない環境での工夫](3名), [人間性を高めることと競技力向上の両立](3名), [生徒の自立を促すこと](3名), [民主的なチーム運営](3名), [サ

ッカーの楽しさを教える](2名), [練習環境の整備](3名)であった。特に, 日本の指導者からは, [国体チームの選手育成](1名), [トレセンの選手育成](1名)と[アカデミーの選手育成](1名), [スポーツ少年団の選手育成](1名)というサッカー部以外の組織をボランティアで指導する概念が抽出された。一方, 中国の指導者から抽出された概念は, [サッカーに関する専門書](2名), [習熟度別指導](3名), [短い練習時間](3名), [人間性を高めることより競技力向上を重視すること](3名), [教師の指示による指導](3名), [早い時期からの育成](3名), [保護者とクラス担任からの理解](3名), [サッカーの競技人口を増やすこと](3名), [国の代表チームの成績をあげること](3名)であった(表4)。

表4 カテゴリー, サブカテゴリー, 概念, 定義および対象者数の一覧

| カテゴリー | サブカテゴリー | 概念 | 定義 | 対象者 | | | | | | 対象者数 |
|---------------------|---------|-------------------------|---|-----|----|----|----|----|----|------|
| | | | | J① | J② | J③ | C① | C② | C③ | |
| 指導力を高める努力 | - | 専門機関からの出版物 | サッカー協会の出版物(本, 雑誌など)を参考にする。 | ○ | ○ | ○ | | | | 3 |
| | | サッカーに関する専門書 | サッカーに関する専門書を参考にする。 | | | | ○ | ○ | | 2 |
| | | 研修への参加 | サッカー協会が主催する研修に参加する。 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 5 |
| | | 他の教師との情報交換 | 同僚や先輩の教師から情報を得る。 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 4 |
| | | ヨーロッパのサッカーの情報 | 世界の最先端の情報を参考にする。 | ○ | | | ○ | | | 2 |
| 地域の子どもの育成 | - | 国体チームの選手育成 | 国体チームをボランティアで指導する。 | ○ | | | | | | 1 |
| | | トレセンの選手育成 | 地区のトレセンチームをボランティアで指導する。 | | ○ | | | | | 1 |
| | | アカデミーの選手育成 | トレセンへの入部希望があるが, 入部できない子どもを独自に組織し育成する。 | | ○ | | | | | 1 |
| | | スポーツ少年団の選手育成 | 地域の小学生をボランティアで指導する。 | | | ○ | | | | 1 |
| 練習状況 | - | 習熟度別指導 | 習熟度によって練習内容を変える(1, 2年生には体づくり, 3年生には戦術練習)。 | | | | ○ | ○ | ○ | 3 |
| | | 恵まれない環境での工夫 | 限られた条件(狭いコート, 短い練習時間)の中で, 練習を工夫する。 | ○ | ○ | ○ | | | | 3 |
| | | 短い練習時間 | 短い練習時間しか設定できない。 | | | | ○ | ○ | ○ | 3 |
| 生徒の成長を促す工夫 | - | 人間性を高めることより競技力向上を重視すること | 人間性を高めることより競技力向上を目指して指導する。 | | | | ○ | ○ | ○ | 3 |
| | | 人間性を高めることと競技力向上の両立 | 人間性を高めることと競技力向上の両立を目指して指導をする。 | ○ | ○ | ○ | | | | 3 |
| | | 生徒の自立を促すこと | 練習内容や試合での作戦を決める権利を教師から生徒へと移譲する。 | ○ | ○ | ○ | | | | 3 |
| | | 教師の指示による指導 | 練習内容や試合での作戦は教師が決める。 | | | | ○ | ○ | ○ | 3 |
| | | 民主的なチーム運営 | グラウンドの整備, 道具の片づけ, 掃除などを部員全員が行うこと。 | ○ | ○ | ○ | | | | 3 |
| | | 生徒のやる気 | 生徒のやる気が大事である。 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 6 |
| 生徒の技能を高める要因 | - | 早い時期からの育成 | 小学校段階という早い時期から育成する必要がある。 | | | | ○ | ○ | | 3 |
| | | 保護者とクラス担任からの理解 | 生徒がサッカーを行うことを保護者とクラス担任が理解し, 応援することが大事である。 | | | | ○ | ○ | ○ | 3 |
| | | 指導者の質を高めること | サッカーの水準を高めるためには, 指導者の質を高める必要がある。 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 6 |
| サッカーの水準を高めるために必要なこと | - | サッカーの競技人口を増やすこと | サッカー人口を増やすことが大事である。 | | | | ○ | ○ | ○ | 3 |
| | | 国の代表チームの成績をあげる | 国の代表チームの成績を上げることがサッカーの水準を高める。 | | | | ○ | ○ | ○ | 3 |
| | | サッカーの楽しさを教える | まず子どもにはサッカーの楽しさを教えることが大事である。 | ○ | ○ | | | | | 2 |
| | | 練習環境の整備 | サッカー部専用のコート, 芝生のグラウンドがあるとよい。 | ○ | ○ | ○ | | | | 3 |
| | | 概念数(25) | | | | | | | | |

3. 2. 全体としてのストーリーライン

日本の指導者のインタビュー内容を分析した結果、15の概念、2つサブカテゴリーおよび5つカテゴリーが生成された。図1は、日本の分析結果である結果図を示している。

日本の指導者から導かれたストーリーラインは、次の通りであった。日本の指導者は、[専門機関からの出版物]、[研修への参加]、[他の教師との情報交換]、[ヨーロッパのサッカーの情報]を通して<指導力を高める努力>を行っていた。このような努力によって得た知識を活かして、<生徒の技能を高める要因>である[生徒のやる気]を高めていた。また、中学校のサッカー部の指導だけでなく、<地域の子どもの育成>をボランティアで行っていた。サッカー部の指導では、[生徒の自立を促すこと]を最終目標として、[人間性を高めることと競技力向上の両立]と[民主的なチーム運営]を【指導理念】としていた（<生徒の成長を促す工夫>）。日本の【練習状況】は、サッカー部専用のグラウンドではなく、他部との共用のためグラウンドが狭く、ゴール前での攻防の練習をするなど[恵まれない環境での工夫]がみられた。最終的に、日本の<サッカーの水準を高めるために必要なこと>として、[サッカーの楽しさを教える]こと、そのような指導ができるように[指導者の質を高めること]、そして[練習環境の整備]を挙げた。

一方、中国の指導者のインタビュー内容を分

析した結果、14の概念、2つサブカテゴリーおよび5つカテゴリーが生成された。図2は、中国の分析結果である結果図を示している。

中国の指導者から導かれたストーリーラインは、次の通りであった。中国の指導者は、[サッカーに関する専門書]、[研修への参加]、[他の教師との情報交換]、[ヨーロッパのサッカーの情報]を通じて<指導力を高める努力>を行っていた。[人間性を高めることより競技力向上を重視すること]を【指導理念】として掲げ、[教師の指示による指導]を徹底していた（<生徒の成長を促す工夫>）。【練習状況】としては、熟練者と未熟練者に対して違う練習内容を行わせるなど[習熟度別指導]を基本としていた。この他、中国では運動よりも学業を優先する傾向が強いことから[短い練習時間]しかとれないという状況が見受けられた。生徒の技能を高めるためには、何よりもやる気のある生徒を入部させること[生徒のやる気]、保護者とクラス担任が生徒のサッカー活動に理解を示し、生徒を支援すること[保護者とクラス担任からの理解]、および中学校よりもっと早い段階から選手育成を行うこと[早い時期からの育成]を挙げた（<生徒の技能を高める要因>）。最終的に、<サッカーの水準を高めるために必要なこと>として、[指導者の質を高めること]、[サッカーの競技人口を増やすこと]および[国の代表チームの成績をあげる]を挙げた。

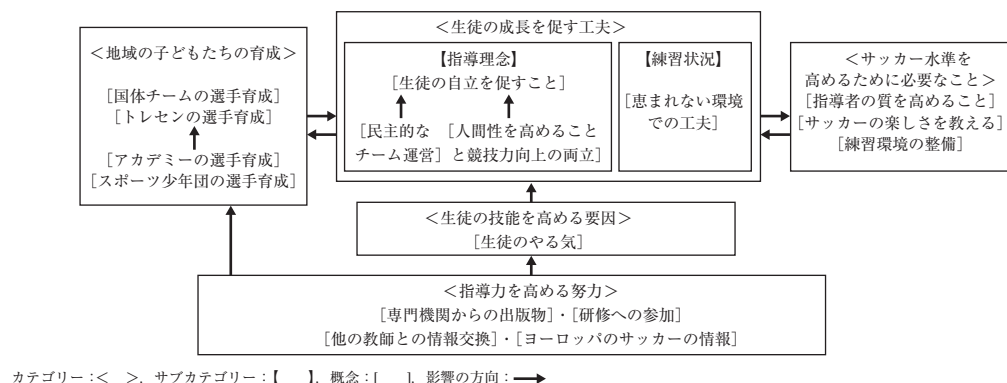


図1 日本の結果図

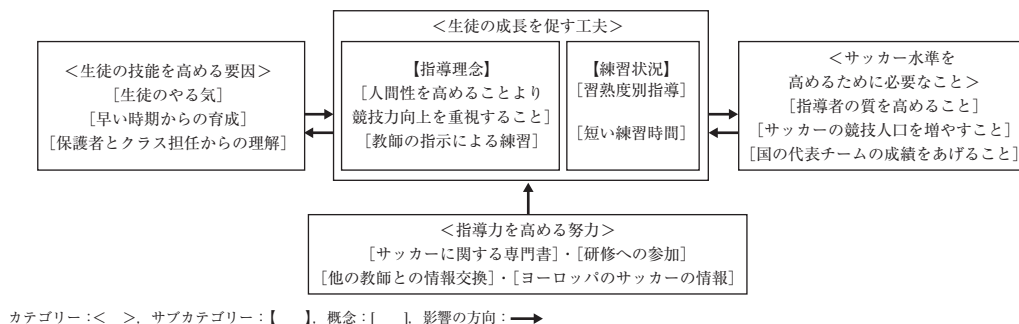


図2 中国の結果図

3.3. カテゴリー，サブカテゴリー，概念の概要

ここでは、カテゴリー，サブカテゴリー，および概念の関係を説明する。また、必要がある場合は、指導者の発言を { } で引用する。

3.3.1. <指導力を高める努力>カテゴリー

<指導力を高める努力>カテゴリーは、[専門機関からの出版物]，[サッカーに関する専門書]，[研究への参加]，[他の教師との情報交換] および [ヨーロッパのサッカーの情報] という5つ概念で構成された。

指導者は、個人の指導力を高めるため、JFA出版の本、雑誌など[専門機関からの出版物] および [サッカーに関する専門書] を参考にし、サッカー協会が主催する [研修への参加] も行っていた。なかには [ヨーロッパのサッカーの情報] を参考にしている指導者もいた。例えば、J①はヨーロッパ研修に、C①はフランス研修に行ったことを話した。また、同僚や先輩の教師からの情報や助言を参考にするなど [他の教師との情報交換] を通して<指導力を高める努力>を行っていた。

3.3.2. <地域の子どもたちの育成>カテゴリー

<地域の子どもたちの育成>カテゴリーは、[国体チームの選手育成]，[トレセンの選手育成]，[アカデミーの選手育成]，および [スポーツ少年団での選手育成] という4つ概念で構成された。

日本の指導者は、サッカー部の生徒を指導す

るだけでなく、<地域の子どもたちの育成>をボランティアで行っていた。例えば、J①は [国体チームの選手育成] に、J②は [トレセンの選手育成] にかかわっていた。J②は、自ら指導するサッカー部の部員で競技レベルの高い生徒をトレセンに送っていた。また、J②は、競技レベルが高く、トレセンへの入部希望があるが、入部できない生徒を集めてアカデミーを組織し、[アカデミーの選手育成] も行っていた。J③は、中学校校区の小学生、すなわち中学生になると中学校のサッカー部に入部するかもしれない小学生が所属する [スポーツ少年団の選手育成] にボランティアでかかわっていた。

3.3.3. <生徒の成長を促す工夫>カテゴリー

<生徒の成長を促す工夫>カテゴリーは、サブカテゴリーとして、【指導理念】と【練習状況】の2つが作成された。[習熟度別指導]，[恵まれない環境での工夫]と [短い練習時間]，[人間性を高めることより競技力向上を重視すること]，[人間性を高めることと競技力向上の両立]，[生徒の自立を促すこと]，[教師の指示による指導] および [民主的なチーム運営] の8つの概念で構成された。

日本の指導者は、狭いグラウンドという限られた条件のもとで練習内容を工夫するなど [恵まれない環境での工夫] を行っていた ([練習状況])。

【指導理念】について、日本の指導者は、[生徒の自立を促すこと] を最終目標として掲げ、

グラウンドの整備や道具の片づけ、用具庫の掃除などを部員全員に分担して行わせていた[民主的なチーム運営]。練習内容、および、試合での作戦なども生徒に決めさせるという生徒への権利委譲を理想とする考え方が認められた。社会性の育成、仲間への思いやりなど人間性を高めることとあわせて競技力を高めることも大事にしており[生徒の人間性を高めることと競技力向上の両立]を目指すという姿勢が認められた。

一方、中国の指導者は、生徒の習熟度によって練習内容を変える[習熟度別指導]を行っていた。例えば、C①は、未熟練者である1年生と2年生には基礎練習や体づくりを、3年生には簡単な戦術能力を高める練習を行わせていた。またC①からは、[平日は授業が終わる17時に練習が始まり、1時間しか練習できない]と[短い練習時間]しか設定できないという発言があった(【練習状況】)。

【指導理念】について、中国の指導者も生徒の人間性を高めることを主張した。例えば、C①は、[チームの一員としてサッカーのルールを守ること、それだけでなく社会のルールを守ること]も大事です。責任感を身に付け、協調性を必ず持つべきです]と、C②も、[サッカーの発展を考えると、やはり人間性は大事だと思います]と発言した。しかし、中国の指導者は、生徒の人間性を高めるような指導を行っていなかった。例えば、日本の指導者のように生徒の自主性を育成しようという考えはみられず[教師の指示による指導]を徹底していた。道具の片づけについて、C①は、[毎日練習が終わったら、2人の生徒を指定して片付けさせます]、C③は、[毎回練習前に、今日どんな道具を使うか、生徒が聞きに来るのでそれを指示します]と発言した。また、練習内容、および、試合での作戦なども指導者が決めていた。その理由について、C①は、[練習内容を生徒に決めさせることは基本的にしません。生徒はサッカーに関する知識を十分に理解していないので、科学的な練習を行うために僕が決めます]と発言した。また、C③も、[練習内容、試合の戦

術は私が決めます。生徒たちに発言権はありません]と語った。

このように中国の指導者は、人間性を高める具体的な手立てを述べることはなかったが、競技力を高めることに関しては、次のような発言が認められた。例えば、C①は、[練習を通して生徒のスピードやパワーなどを高め、技能の向上を図ります。また、生徒には頭で考えさせ、目でまわりを観察させ、合理的な判断を行ってボールを処理することを身につけさせることを重視しています]と述べた。同様にC②は、[基礎技術を身につけさせ、個人技能を高めることを重視しています。次に体力を向上させることが大事だと思います]と発言した。このように中国の指導者は、人間性の育成を掲げながら、実際には人間性を高める具体的な手立てを持たず、[人間性を高めることより競技力向上を重視すること]が指導理念として認められた(＜生徒の成長を促す工夫＞)。

3.3.4. <生徒の技能を高める要因>カテゴリー

<生徒の技能を高める要因>カテゴリーは、[生徒のやる気]、[早い時期からの育成]と[保護者とクラス担任からの理解]という3つ概念で構成された。

日本の指導者は、<生徒の技能を高める要因>として[生徒のやる気]をあげ、[生徒のやる気]を高めるような指導を行っていた。例えば、J①は、[自分で上手になりたいと思うようなスパイラルにしとかなないと多分、結局自分に足りないところはここやし、こういう風に考えてやろうとしても、プロに行ってからとも言われた練習しかないのでは、うまくならない。そういうふうなことができるような形で送りだせたらなと思っています]と発言した。

一方、中国の指導者は、[生徒のやる気]の重要性を主張はするが、入部の際にやる気の有無を吟味すると述べた。例えば、C③は、[入部させる前に、サッカーに対するやる気を生徒がどれくらい持っているかを確かめます。入部前にはテストがあり、レベルが低い子ややる気がない子は採用しません]と発言した。さらに、

中国の指導者は、生徒は早い時期からサッカーの指導を受ける必要があると主張した（[早い時期からの育成]）。例えば、C③は、{特に、小中学校においてサッカー選手を育成することは一番大切なこと、小学校時にサッカーの指導を受けていない子たちは中学校3年間にサッカーのレベルを高めることは難しいと思います}と発言した。また、保護者とクラス担任が生徒の活動に理解を示すことの重要性も主張した[保護者とクラス担任からの理解]。例えば、C②は、{保護者からの支持が必要だと思います。多く生徒はサッカーが好きですが、保護者の反対があります。結局、才能がある子もあきらめざるを得ません。また、サッカーに反対するクラス担任が多いです。子どもはこのような圧力により、だんだん諦めるようになります}と発言した。

このように中国の指導者は、日本の指導者と異なり自身の指導により生徒の技能を高める努力をするのではなく、<生徒の技能を高める要因>として指導者の努力とは関係のない外的な要因を挙げる傾向が認められた。

3. 3. 5. <サッカーの水準を高めるために必要なこと>カテゴリー

<サッカーの水準を高めるために必要なこと>カテゴリーは、[指導者の質を高めること]、[サッカーの競技人口を増やすこと]、[国の代表チームの成績をあげること]、[サッカーの楽しさを教える]と<練習環境の整備>という4つ概念で構成された。

最後に指導者は<サッカーの水準を高めるために必要なこと>に対して、次のように語った。日本の指導者は、サッカーの水準を高めるためには、まず子どもに[サッカーの楽しさを教えること]が重要で、そのような指導ができる指導者を育成すること、すなわち[指導者の質を高める]ことが大事であると述べた。ただ、日本のサッカーの練習環境はヨーロッパに比べると恵まれてはならず[練習環境の整備]を期待する発言もあった。例えば、J①は、{日本もヨーロッパと同じように2時間とかでやりまし

ようっていうことになっているんですけど、ヨーロッパでは2時間で20名程度でフルピッチの人工芝で練習をしています。日本は百数人いる中で狭いサッカー場で練習しています}と発言した。

一方、中国の指導者も、日本の指導者と同様に、サッカーの水準を高めるためには[指導者の質を高めること]が大事であると発言した。例えば、C①は、{第一は、指導者だと思います。現在、中国では、学校におけるサッカーの指導者はサッカーの専門じゃなくて、ライセンスも持っていない人が多い}と発言した。また中国は、サッカーの競技人口が少なく、国のサッカーの水準を高めるためには[サッカーの競技人口を増やすこと]が必要であると述べた。サッカーの競技人口を増やすためには、[国の代表チームの成績をあげること]がよい手立てであるという発言もあった。例えば、C①は、{国家代表チームはずっと低迷しているので、サッカーをすることは前途がないと思っている人が多い}、特にC③は、{もし、国家代表チームが優秀な成績をあれば、保護者は子どもがサッカーを行うことを強く支持するようになります。卓球のように、中国は卓球のレベルが高いので、両親は子どもが卓球に参加することを賛成します}と発言した。

4. 考 察

本研究では、日本と中国における中学校のサッカー部の指導者を対象にインタビュー調査を行い、サッカーの指導について比較し、日本と中国における指導の違いを明らかにすること目的とした。その結果、第1に、生徒の成長を促すために、日本の指導者は、地域の子どものためのサッカーの指導をボランティアで行うなど献身的に努力する傾向が認められたのに対し、中国の指導者は、自分で努力することより保護者や担任の理解を求めるなど外的な要因に解決を求める傾向が認められた。第2に、日本の指導者は、生徒の人間性を高めることと競技力向上の両立を目指していたのに対し、中国の指導者は、日本の指導者に比べて競技力向上を重視す

る傾向が認められた。

日本と中国の指導者にはサッカーの指導に違いがみられたが、なぜこのような違いが認められたのであろうか。ここでは、サッカーの指導に違いが認められた理由について検討する。

現在中国では、方案の策定にみられるようにサッカー強化に向けて、中央政府からの強い圧力があり、中国の指導者は競技成績をあげることを強いられている。例えば、方案では、小学校から大学までの4つのレベルにおける競技大会を体系化すること、特に中学校および高等学校のサッカー競技大会における成績を学校の評価につなげることが提案されていた(國務院, 2015)。競技大会で成績をあげた学校は、国家級の強化モデル校に認定された。C③が「強化モデル校に認定されると、毎年国から2万元から5万元(日本円で13万円から33万円)の補助金がもらえる」と発言したように、強化モデル校に認定されると国から補助金が支給されていた。このように中国では、サッカーの成績をあげるにより名誉だけでなく、金銭的な援助が与えられる。そのため、中国の指導者は、生徒の競技力を高め、チームの成績をあげることに熱心になり、日本の指導者のように人間性を高めることと競技力向上の両立を目指すのではなく、技術指導を重んじる傾向が認められたのではないかと考えられる。

また、中国のサッカーに関する先行研究では、サッカー振興の問題点として、生徒がサッカーをすることに對して保護者およびクラス担任の理解が得られないという指摘があった(邱ほか, 2016; 龔ほか, 2017)。本研究のインタビュー調査でも、中国の指導者は、保護者およびクラス担任の理解があれば、生徒はサッカーを十分に行うことができると話をしていた。彼らの理解と支持があれば、もっとよい成績をあげることができると考えているのではないかと推察される。このように中国の指導者は、目の前の生徒を自分自身の努力で成長を促すというよりも、自分以外の外的な要因に解決を求める傾向が認められた。

一方日本では、指導者は、サッカーをボラン

ティアで指導しているように、何か報酬を期待して指導しているのではなかった。ただ生徒の成長を願って指導をしており、教師という職業柄、サッカーの競技力を高めることに加えて、人間性を高めることも重視しているのではないかと考えられる。古賀・堀野(2013)は、高等学校サッカー部の指導者にインタビューを実施し、サッカー部の指導者が「人間力の向上」と「プレーパフォーマンスの向上」を指導理念としていることを明らかにした。対象は高等学校サッカー部の指導者であるが、日本のサッカー部の指導者が、本研究で得られた結果と同様に、「人間性を高めることと競技力向上の両立」を目指していることが理解できる。また、立木(2018, pp.16-17)は、中学校サッカー部の指導者にインタビューを実施し、サッカーを通して人間性を育成すること、同時に人間性の育成を通して競技力を高めること、すなわち人間性を高めることと競技力の向上の両面を重視するという指導理念を持っていることを明らかにした。本研究でも日本の指導者には、人間性を高めることがサッカーの技能習熟に結びつき、ひいては勝利に結びつくという考え方が認められた。例えばJ②は、「筋としてあるのは人間性なんです。技術と戦術を使うのは人間なので、人間性がないといい選手になれません」と発言しており、人間性を高めることと競技力の向上は切り離せない課題であるという考え方が認められた。

先に示したが、日本では、JFAが中学校の部活動を全面的に支援している。JFAは、2014年に「JFAグラスルーツ宣言」を発表し、「誰もが・いつでも・どこでも」サッカーを身近に心から楽しめる環境を提供し、その質の向上に努めることを宣言(JFA, online4)した。競技力の向上と、サッカーを通じた人間性の育成というJFAの目標は、当然中学校のサッカー部の指導者にも強い影響を与えていることが推察できる。かつ、2018年に、スポーツ庁から「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が発表され、部活動について「生徒の自主的、自発的な参加により行われ、学校教

育の一環として教育課程との関連を図り、合理的でかつ効率的・効果的に」(スポーツ庁, 2018, p.1) 取り組むことが通達された。日本の指導者がサッカーの指導において、人間性を高めることと競技力の向上の両立を目指すことの背景には、JFA およびスポーツ庁の取り組みの影響が考えられよう。

最後に、中国に関していえば、日本のサッカーの指導者にみられた人間性の育成にかかわる指導方法を中国の指導者が取り入れることは、冒頭で示した中国においてサッカーの指導場面で生じている様々な問題の改善に有効ではないかと考えられる。

5. まとめ

本研究では、日本と中国における中学校のサッカー部の指導者を対象にインタビュー調査を行い、サッカーの指導について比較し、日本と中国における指導の違いを明らかにすることを目的とした。

その結果、調査対象とした6名の指導者からの情報ではあるが、次の2点が明らかになった。第1に、生徒の成長を促すために、日本の指導者は、学校のサッカー部におけるサッカーの指導をボランティアで行うなど献身的に努力する傾向が認められたのに対し、中国の指導者は、自分で努力することより保護者や担任の理解を求めるなど外的な要因に解決を求める傾向が認められた。第2に、日本の指導者は、生徒の人間性を高めることと競技力向上の両立を目指していたのに対し、中国の指導者は、日本の指導者に比べて競技力向上を重視する傾向が認められた。

本研究の結果に基づき、筆者は、中国における中学生のサッカー指導について、以下のような提案を考えている。

中国の指導者は、日本の指導者に比べて献身的に指導に当たるといふ姿が認められなかった。中国の指導者は、日本の指導者を見習って、学校におけるサッカー教育を地域にひろめ、より多くの子供たちにサッカーに触れる機会をつくる必要があるだろう。これにより、人材育成

の道を広げることができる。

中国の学校サッカーの指導者は、指導理念として学校教育の理念に立ち返り、競技力の向上とともに生徒の肉体的な成長を大切にして、生徒が総合的に成長できるようにする必要があると考えられる。

しかしながら本研究では、次の限界が認められ、これらは今後の課題とした。

第1に、中学校を対象とし、小学校あるいは高等学校におけるサッカーの指導を対象としなかったことである。中国では、学校におけるサッカー振興に、小学校あるいは高等学校も重要な役割を担っている。今後、中国におけるサッカー振興にかかわる状況を明確にするため、小学校あるいは高等学校を対象として調査する必要がある。

第2に、本研究では、日本と中国における6人の指導者を対象にインタビュー調査を行い、中学校におけるサッカーの指導を明らかにした。M-GTAの分析方法に基づく理論的飽和を考えた場合、インタビューの対象人数を増やす必要がある。

付 記 本研究はJSPS 科研費：JP19K11631の助成を受けたものである。

謝 辞

本研究は、調査に協力してくださいました日本および中国の中学校の先生方のご支援とご協力により実施することができました。この場をおかりして深謝申し上げます。

注

注1) 方案では、課外活動であるサッカーチームの設立を推進することの他、体育でサッカーの授業時間を増やすこと、サッカーに優れた生徒がサッカーの練習に積極的に参加できるように学習面で配慮をすること、サッカーの指導者を育成することが掲げられた。

注2) 日本では、中学校における部活動は、学習指導要領において、学校教育の一環と

して教育課程との関連を図りながら実施することが定められている(文部科学省, 2017, p.27). 一方, 中国では, 課外活動であるサッカーチームは, 日本の学習指導要領に該当する2011年に公布された新課程標準の中で位置づけられてはなかった。しかし, 2015年に策定された方案の第1章総則第5の22で,「小・中・高・大学のサッカーチームの設立を推し進め, 早急に学校にサッカーチームを持つことが当たり前という環境をつくり」(国家発展改革委員会, 2016)と, サッカーチームの設立を国をあげて推進することが定められた。

文 献

- 陳星潭・康涛(2017) 中国与日本校园足球發展的比較研究. 南京体育学院学報, 31(2): 70-75.
- 丁斌・刘佳・彭恩嘉・趙雪峰・張軍(2018) 中日韓校园足球竞赛体系与后备人才培养研究. 体育科技, 39(1): 126-128.
- FIFA (online) FIFA U-20 world cup Poland 2019. <https://www.fifa.com/u20worldcup/news/lee-lunin-headline-award-winners-at-poland-2019>. (参照日2020年4月28日).
- 龔波・陶然成・董众鸣(2017) 当前我国校园足球若干重大問題探討. 上海体育学報, 40(1): 61-67.
- 技術委員会テクニカルハウス編(2018) 中学校部活動サッカー指導の手引き. 公益財団法人日本サッカー協会.
- 郭江・謝松林(2018) 校园足球“教育逻辑”与“争光逻辑”的辩证研究. 体育研究与教育, 33(05): 59-62.
- Japan Football Association (online1) 学校体育・部活動中学校部活動サッカー指導の手引き. www.jfa.jp/coach/physical_training_club_activity/guidance.html#pankz. (参照日2020年4月18日).
- Japan Football Association (online2) リスペクト宣言. <https://www.jfa.jp/respect/declaration/>. (参照日2020年4月29日).
- Japan Football Association (online3) JFAの目標. https://www.jfa.jp/about_jfa/ideal/. (参照日2020年4月26日).
- Japan Football Association (online4) JFAグラスルーツ宣言. www.jfa.jp/grass_roots/declaration/. (参照日2020年4月26日).
- 国家発展改革委員会(2016) 中国足球中長期發展规划(2016-2050). http://www.moe.gov.cn/jyb_xxgk/moe_1777/moe_1779/201604/t20160411_237461.html. (参照日2020年4月18日).
- 國務院(2015) 中国足球改革發展總体方案. http://www.gov.cn/jq/2015/06/01/content_4741177.htm. (参照日2020年4月26日).
- 古賀康彦・堀野博幸(2013) Jリーグクラブ・ユース指導者と高等学校サッカー部指導者との指導哲学の比較. スポーツ科学研究, 10: 173-182.
- 木下康仁(2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの实践 質的研究への誘い. 弘文堂.
- 劉夫力(2019) 我国校园足球本質及与实践对接—兼谈校园足球与学校教育的关系—. 体育学刊, 26(3): 78-82.
- 文部科学省(2017) 中学校学習指導要領(平成29年告示). http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf. (参照日2020年4月26日).
- メリアム:堀薫夫・久保真人・成島美弥訳(2004) 質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー. ミネルヴァ書房.
- 潘頂章・陳飛飛・陸亨伯(2017) 中日韓青少年校园足球資源管理之比較. 浙江体育科学, 39(3): 81-85.
- 邱林・戴福祥・張延安・曾丹(2016) 我国校园足球政策执行效果及主要影响因素分析. 体育学刊, 23(06): 98-102.
- スポーツ庁(2018) 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン. https://www.sport.go.jp/press/20180418_01.html.

mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf. (参照日 2020 年 4 月 17 日).

立木宏樹 (2018) 学校運動部とクラブチームにおける「競技力の育成」と「人間教育」をめぐる今日の諸相：中学生年代のサッカー指導者から得られた会話データの質的検討をもとに. 九州体育・スポーツ学研究, 32 (2) 9-19.

梅澤秋久 (2014) 運動部活動における勝利追求主義とケア思想 - 桜宮高校の体罰事件とサッカー U17 日本代表「96 ジャパン」に着

目して -. 横浜国立大学教育学会研究論集, 1 : 71-81.

朱帥・秋鳴・曲圣卿 (2019) 上海市高校校园足球联赛赛场不良行为剖析. 湖北体育科技, 38 (8) : 724-728.

張帥 (2017) 中日韓中小校园足球發展比較研究. 武術研究, 2 (4) : 135-138.

張明・李改 (2018) 中日校园足球后备人才培养的分析及其启示. 体育科学研究, 22 (3) : 75-78

(受付日 2021/5/25 受理日 2021/11/5)